



TITLE:

# Multiplicity free property for generalized Gelfand-Graev representations of semisimple Lie groups

AUTHOR(S):

山下, 博

---

CITATION:

山下, 博. Multiplicity free property for generalized Gelfand-Graev representations of semisimple Lie groups. 数理解析研究所講究録 1987, 632: 186-203

ISSUE DATE:

1987-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/100047>

RIGHT:

Multiplicity free property for generalized Gelfand-Graev  
representations of semisimple Lie groups

京大理 山下 博 (Hiroshi YAMASHITA)

§1. 序.  $G$  を中心有限、連結半単純リー群、 $\mathfrak{g}$  をそのリー環とする。  $G$  の極大可換部分群の非退化な指標から誘導された  $G$  の表現は、Gelfand-Graev (G.G.) 表現と呼ばれる。  $G$  が線型かつ quasi-split の場合には、G.G. 表現は、 $C^\infty$ -context で multiplicity-free である ([9])。 すなわち、  $G$  の任意の既約 unitary 表現をとったとき、それに対応する  $G$  の smooth な表現の、G.G. 表現への連続かつ  $G$ -equivariant な埋め込み (Whittaker model) は一意である。 本稿では、この性質の一般化について考察する。

いかなる既約表現が Whittaker model を持つかという事については、おもに主系列表現を通して、研究が進められてきた (例えば、[4])。 その一方、[2] において、highest weight を持つ既約表現は、  $G$  が特別な場合を除いては Whittaker model を持たない事が示され、unitarizable highest weight module が infinitesimal に埋め込める様に、G.G. 表現の一般

化がなされた。また、 $p$ -進体上の rank の低い群 ( $\mathrm{GSp}(2)$ ,  $\mathrm{SU}(2,1)$ ) に対しては、上と同様な一般化が研究されている ( $\mathrm{GSp}(2)$  については、例えば [6], [7])。

この様に、 $G$  のすべての既約表現を相手にする場合には、 $G$ . $G$ .表現の一般化が必要になる。[3] において、上記をすべて含む統一的な一般化 — generalized Gelfand-Graev ( $g$ . $G$ . $G$ .) 表現 — が、有限体または局所体上の半単純代数群に対して定義され、有限体上の群について研究されている。

我々は、 $G$  の  $g$ . $G$ . $G$ .表現における (縮退) 主系列表現の重複度について調べた ([10])。一般には、 $g$ . $G$ . $G$ .表現に無限の重複度で現われる既約表現があった。そこで我々は、 $g$ . $G$ . $G$ .表現における各既約表現の重複度を、高々有限に、できれば高々 1 に reduce するべく、reduced  $g$ . $G$ . $G$ .表現なるものを考え (§4 参照)、[2] と同様の幾つかの場合に、それらが実際に multiplicity free になる事を示す (定理 9)。定理 9 は、 $\mathrm{GSp}(2)$  に対する [6] および [7] の結果と、一部対応している。また、主系列表現の reduced  $g$ . $G$ . $G$ .表現における重複度について、その上からの評価を与える (命題 10)。

## §2. Generalized Gelfand-Graev 表現 ([3])

$\mathfrak{g} = \mathfrak{k} \oplus \mathfrak{p}$  を Cartan 分解、それに対応する Cartan 対合

を  $\theta$  で表す.  $\mathfrak{p}$  の極大可換部分空間  $\mathfrak{o}$  をとり、 $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} \oplus \mathfrak{o} \oplus \mathfrak{n}$ ,  $G = KA_pN$  ( $A_p = \exp \mathfrak{o}$ ) を、各々対応する  $\mathfrak{g}$ ,  $G$  の岩沢分解とする.  $\Lambda$  を  $\mathfrak{g}$  の  $\mathfrak{o}$  に関する root 系、 $\Lambda^+$  を  $\mathfrak{n}$  に対応する  $\Lambda$  の正の root 全体、 $\Pi$  を  $\Lambda^+$  の simple root 全体とする.

$A$  を  $\mathfrak{g}$  の 0 でない中零元とする. この時、Jacobson-Morozov の定理により、 $A$  を含む  $\mathfrak{sl}_2$ -triple  $\{A, H, \bar{A}\} \subseteq \mathfrak{g}$ :

$$[H, A] = 2A, \quad [H, \bar{A}] = -2\bar{A}, \quad [A, \bar{A}] = H$$

が存在する.  $A$  の代りに、その適当な  $\text{Ad}(G)$ -共役を考えることにより、 $H$  は  $\mathfrak{o}$  の dominant element と仮定してよい.  $\mathfrak{sl}_2$  の有限次元表現論により、 $\text{ad } H$  は  $\mathfrak{g}$  上半単純で、その固有値はみな整数である.  $\mathfrak{g}$  の  $\text{ad } H$  による固有空間分解を、 $\mathfrak{g} = \bigoplus_{i \in \mathbb{Z}} \mathfrak{g}(i)_A$  と書く.  $i \geq 1$  に対して、 $\pi(i)_A = \sum_{k \geq i} \mathfrak{g}(k)_A$  は、 $\pi$  の部分環であり、 $\pi(1)_A$  は、放物型部分環  $\mathfrak{g}(0)_A \oplus \pi(1)_A$  の中零根基である.  $(\xi_A, \mathcal{H}_A)$  を、 $\pi(1)_A$  上の線型形式  $X \mapsto B(X, \theta A)$  ( $B$  は  $\mathfrak{g}$  の Killing 形式) に Kirillov の方法で対応する、 $N_A = \exp \pi(1)_A$  の既約 unitary 表現とする. この時、次で定まる  $G$  の表現  $(\pi_A, C^\infty(G; \xi_A))$  を考える:

$$C^\infty(G; \xi_A) = \{f: G \rightarrow \mathcal{H}_A; C^\infty\text{-函数}, f(gn) = \xi_A(n)^{-1} f(g), g \in G, n \in N_A\},$$

$$(\pi_A(g)f)(x) = f(g^{-1}x), \quad f \in C^\infty(G; \xi_A), \quad g, x \in G.$$

$C^\infty(G; \xi_A)$  に通常の Schwartz 位相を導入すると、 $\pi_A$  は  $G$  の smooth な表現となる.  $\pi_A$  は、表現の同値類としては、

$\mathfrak{sl}_2$ -tripletの取り方に依らず  $A$  に依ってのみ定まる. 更には、 $A$  を通る巾零  $\text{Ad}(G)$ -軌道に依ってのみ定まる.

定義. 表現  $(\pi_A, C^\infty(G; \xi_A))$  を、 $A$  に対応する (もしくは、 $A$  を通る巾零  $\text{Ad}(G)$ -軌道に対応する) generalized Gelfand-Graev  $(g, G, G)$  表現 と呼ぶ.

注意.  $A$  が  $\mathfrak{g}$  の正則巾零元の場合には、 $N_A = N$  であり、 $\xi_A$  は  $N$  の非退化な unitary 指標である. この時、 $\pi_A$  はもともと  $G, G$  表現と呼ばれていたものである. ここで、 $N$  の一次元表現  $\eta$  が非退化とは、 $\eta|_{\exp \mathfrak{g}_\lambda} \neq 1, \forall \lambda \in \Pi$  が成立つことをいう ( $\mathfrak{g}_\lambda$  は  $\lambda$  の root 空間).

### §3. 超函数空間 $\mathcal{J}_A, \mathcal{J}_A^s$ .

$G$  の既約表現から  $g, G, G$  表現への、intertwining作用素を考察する際に現われる超函数の台について調べる.

3.1.  $\mathfrak{g}_\mathbb{C} = \mathfrak{g} \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C}$  の展開環  $U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$  を、 $G$  上の右不変微分作用素全体と同一視する.  $G$  の開集合  $\Omega$  上の超函数  $T$  に対し、 $D \in U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$  による微分  $DT$  を  $\langle DT, \varphi \rangle = \langle T, D' \varphi \rangle$ ,  $\varphi \in C_0^\infty(\Omega)$  により定める. ここで、 $D \mapsto D'$  は、 $U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$  の principal antiautomorphism.

$P_A = N_G(N_A)$  を、 $N_A$  を中単根基として持つ  $G$  の放物型部分群、 $\bar{P}_A = L_A N_A$  をその Levi 分解とする。  $\bar{P}_A = \theta P_A$  とおく。  
 $W = N_K(\mathfrak{a})/M$ ,  $M = Z_K(\mathfrak{a})$  を  $(\mathfrak{g}, \mathfrak{a})$  の Weyl 群とし、各  $s \in W$  に対し、 $N_K(\mathfrak{a})$  における  $s$  の代表元  $s^*$  を 1 つ取っておく。  
 $W(A) = N_{K \cap L_A}(\mathfrak{a})/M$  を  $W$  の部分群とみなし、商空間  $W/W(A)$  の、 $W$  における 1 つの完全代表系  $W_A$  をとる。この時、 $G$  の  $(MA_P N, \bar{P}_A)$  に関する Bruhat 分解は、 $G = \bigsqcup_{s \in W_A} G_s$ ,  
 $G_s = N s^* \bar{P}_A$  で与えられる。 $\Omega_s = G_s \cup (\bigcup_{s' \in W_A, \dim G_{s'} > \dim G_s} G_{s'})$  ( $s'$  は  $\dim G_{s'} > \dim G_s$  なる  $s' \in W_A$  を動く) は  $G$  の開集合で、 $G_s$  は  $\Omega_s$  の閉部分多様体になる (c.f., [9, Lemma 1.7]). いま、 $G$  (resp.  $\Omega_s$ ) 上の超関数空間  $\mathcal{J}_A$  (resp.  $\mathcal{J}_A^s$ ) を次の如く定める。

$$\mathcal{J}_A = \left\{ T \in C_0^\infty(G)'; \begin{array}{l} \text{(i) } XT = -\sqrt{-1} B(X, \theta A) T, \quad \forall X \in \pi^{(2)}_A \\ \text{(ii) } T \text{ は Casimir 作用素 } \Delta \text{ の固有超関数} \end{array} \right\},$$

$$\mathcal{J}_A^s = \{ T \in C_0^\infty(\Omega_s)'; \text{(i), (ii) および } \Delta_{\text{pt}}(T) \subseteq G_s \}.$$

ここで、 $\Delta_{\text{pt}}(T)$  は  $T$  の台を表す。

我々は、次の方法で  $T \in \mathcal{J}_A^s$  の台について調べる:  $z \in \Delta_{\text{pt}}(T)$  とする。  $z$  の十分小さな開近傍  $Q (\subseteq \Omega_s)$  上で、 $T$  は  $Q \cap G_s$  上の超関数の transversal な方向微分の 1 次結合として、一意的に表示される。条件 (i) と上の表示を用いて、 $\Delta T$  についても同様の表示を計算する。  $\Delta T = \sum \zeta T$  ( $\zeta \in \mathbb{C}$ ) とする。  $0 = \Delta T - \sum \zeta T$  の  $Q$  における表示の一意性から、各微分

を係数とする超函数を辺々比較して、 $z \in \text{spt}(T)$ なる $z$ の必要条件を求める。かくして、次の命題を得る。

命題 1. 任意の  $T \in \mathcal{J}_A^s$  の台は、次で定義される  $G_s$  の閉部分多様体  $D_A^s$  に含まれる。

$$D_A^s = \left\{ z = ns^*\bar{p}; \quad n \in N \cap s^*N_A s^{-1}, \quad \bar{p} \in \bar{P}_A, \right. \\ \left. B(\text{Ad}(n)X, \theta A) = 0, \quad \forall X \in \pi(\mathfrak{z}_A \cap \text{Ad}(s^*)\theta\pi_A) \right\}.$$

系  $A$  は  $\mathfrak{o}$  の正則中零元であるとする。このとき、

- (i)  $W(A) = \{1\}$  であり、 $s \neq 1, s \in W$  ならば、 $D_A^s = \emptyset$  が成立つ。したがって、このとき  $\mathcal{J}_A^s = (0)$ 。
- (ii) 制限写像  $\mathcal{J}_A \ni T \mapsto T|_{\Omega_1} \in \mathcal{J}_A^1$  は単射である。

系の主張自身は、Shalika により既に示されている ([9, Prop. 2.10])。この事実は、 $G$  が quasi-split の場合に、 $G, G$  表現が multiplicity free になることを証明する過程で、重要な位置を占めた。一般の  $G$  に対して、主系列表現の  $G, G$  表現における重複度の評価も、この系から容易に得られる。

3.2. 我々が本稿で問題にする  $g, G, G$  表現を特定する。次の 3.3 において、それらに 命題 1 を apply する。

これ以後 (5.1 と 5.2 は除く)、 $G$  は線型、単純で、 $G/K$  は

Hermite対称空間と仮定する.  $G/K$ 上の複素構造に対応する  $\mathfrak{p}$ 上の  $\text{Ad}(K)$ -不変複素構造を  $J$ とする. このとき、 $\mathfrak{g}$ の中心の元  $Z_0$ が存在し、 $J = \text{ad } Z_0|_{\mathfrak{p}}$ が成立つ.  $\mathfrak{f}$ を  $\mathfrak{g}$ の compact Cartan部分環、 $\Sigma$ を  $(\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}, \mathfrak{f}_{\mathbb{C}})$ の root系とする.  $\sqrt{-1}\mathfrak{f}^*$ に、次の条件を満たす線型順序を入れ、 $\Sigma^+$ を、対応する正の root系とする:  $\alpha$ が正の non-compact root  $\Leftrightarrow \alpha(Z_0) = \sqrt{-1}$ .  $\alpha \in \Sigma$ に対し、 $\alpha$ の root vector  $X_{\alpha}$ を次の様にとる:

$X_{\alpha} - X_{-\alpha}$ ,  $\sqrt{-1}(X_{\alpha} + X_{-\alpha}) \in \mathfrak{k} \oplus \sqrt{-1}\mathfrak{p}$ ,  $[X_{\alpha}, X_{-\alpha}] = H'_{\alpha}$ .  $H'_{\alpha}$ は、 $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$ の Killing 形式により、co-root  $\alpha^{\vee} = \frac{2\alpha}{\langle \alpha, \alpha \rangle}$ に対応する  $\sqrt{-1}\mathfrak{f}$ の元.

$(\gamma_1, \gamma_2, \dots, \gamma_{\ell})$ を、次の条件(i)~(iii)を満たす正の non-compact rootの列とする: (i)  $\gamma_1 < \gamma_2 < \dots < \gamma_{\ell}$ , (ii)  $\alpha = \sum_{k=1}^{\ell} \mathbb{R}(X_{\gamma_k} + X_{-\gamma_k})$ は  $\mathfrak{p}$ の極大可換部分空間, (iii)  $i \neq j \Rightarrow \gamma_i \pm \gamma_j \notin \Sigma$ . いま、 $\mu = \text{Ad}(\exp \frac{\pi}{4}(\sum_{k=1}^{\ell} X_{\gamma_k} - X_{-\gamma_k}))$ とおくと、 $\mu(X_{\gamma_k} + X_{-\gamma_k}) = H'_{\gamma_k}$ . また、 $\lambda_k = \gamma_k \circ \mu|_{\alpha}$ とおくと、 $(\lambda_k)_{k=1}^{\ell}$ は  $\alpha^*$ の直交基底になる.  $(\mathfrak{g}, \alpha)$ の root系  $\Lambda$ に、 $\Lambda^+ = \sum^+ \circ \mu|_{\alpha} \setminus \{0\}$ なる順序を入れると、 $\Lambda^+$ は次のいずれかになる (restricted root theorem, c.f., [5]).

(Case I)  $\Lambda^+ = \{\frac{1}{2}(\lambda_k - \lambda_m); k > m\} \cup \{\frac{1}{2}(\lambda_k + \lambda_m); k \geq m\}$ ,

(Case II)  $\Lambda^+ = \{\frac{1}{2}(\lambda_k - \lambda_m); k > m\} \cup \{\frac{1}{2}\lambda_k; k\} \cup \{\frac{1}{2}(\lambda_k + \lambda_m); k \geq m\}$ .

(Case I) は、丁度  $G/K$ が tube domainに解析同型になる場合



である.

$1 \leq k \leq l$  に対し、 $E_k = \frac{\sqrt{-1}}{2} (H'_k - (X_{\gamma_k} - X_{-\gamma_k}))$  とおく. すると、 $E_k \in \mathfrak{g}_{\lambda_k}$ . さらに、 $H_k = X_{\gamma_k} + X_{-\gamma_k}$ ,  $F_k = b \cdot \theta E_k$ ,  $b = 2 \{ \langle \lambda_1, \lambda_1 \rangle B(E_1, \theta E_1) \}^{-1}$  とおくと、 $\{E_k, H_k, F_k\}$  は  $\mathfrak{sl}_2$ -triplet になる. いま、 $\varepsilon = (\varepsilon_1, \varepsilon_2, \dots, \varepsilon_l)$ ,  $\varepsilon_k = \pm 1$  ( $1 \leq k \leq l$ ) に対して、 $A_\varepsilon = \sum_{k=1}^l \varepsilon_k E_k$ ,  $H = \sum_{k=1}^l H_k$ ,  $\bar{A}_\varepsilon = \sum_{k=1}^l \varepsilon_k F_k$  とおくと、 $\{A_\varepsilon, H, \bar{A}_\varepsilon\}$  もまた  $\mathfrak{sl}_2$ -triplet になる. 我々は、 $A_\varepsilon$  に対応する g.G.G. 表現  $\pi_{A_\varepsilon}$  を問題にする.

注意. (i)  $A_\varepsilon$ ,  $\varepsilon \in \{1, -1\}^l$  は、すべて同一の中零  $I(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$ -軌道  $\mathcal{O} \subseteq \mathfrak{g}_\mathbb{C}$  に属する. ここで、 $I(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$  は  $\mathfrak{g}_\mathbb{C}$  の随伴群を表す. (ii)  $\mathcal{O} \cap \mathfrak{g}$  は、 $l+1$  個の中零  $\text{Ad}(G)$ -軌道の和である. その代表系を、 $\{A_\varepsilon\}$  のなかから取ることができる. (iii)  $\varepsilon = (\varepsilon_k)$ ,  $\varepsilon' = (\varepsilon'_k)$  に対して、 $A_\varepsilon$  と  $A_{\varepsilon'}$  が  $\text{Ad}(G)$ -共役であるための条件は、 $\#\{k: \varepsilon_k = 1\} = \#\{k: \varepsilon'_k = 1\}$  が成立つことである. ただし、集合  $M$  の濃度を  $\#M$  で表す.

3.3.  $A_\varepsilon$  に対して、命題 1 を apply しよう. Weyl 群  $W$  は、 $W = \mathfrak{S}_l \ltimes (\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})^l$  ( $\mathfrak{S}_l$ ;  $l$  次対称群) であり、その  $\wedge$  への作用は、 $(\sigma\delta)\lambda_k = \delta_k \lambda_{\sigma(k)}$ ,  $\sigma \in \mathfrak{S}_l$ ,  $\delta = (\delta_1, \dots, \delta_l)$ ,  $\delta_k = \pm 1$  で与えられる. さらに、 $W(A_\varepsilon) = \mathfrak{S}_l$  ゆえ、 $W_{A_\varepsilon} = (\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})^l$

$= \{\delta; \delta \in \{1, -1\}^l\}$  と取れる. また、 $\mathfrak{g} = \bigoplus_{|i| \leq 2} \mathfrak{g}(i)$ ,  $\mathfrak{g}(i) = \mathfrak{g}(i)_{A_\varepsilon}$  ( $\varepsilon$  に無関係) で、

$$\mathfrak{g}(2) = \sum_{k \geq m} \mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_k + \lambda_m)}, \quad \mathfrak{g}(1) = \sum_k \mathfrak{g}_{\frac{1}{2}\lambda_k},$$

$$\mathfrak{g}(0) = \pi \oplus \alpha \oplus \sum_{k \neq m} \mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_k - \lambda_m)}, \quad \pi = \mathfrak{g}_k(\alpha)$$

が成立つ.  $\pi(i) = \pi(i)_{A_\varepsilon}$  とおく.

補題2 ([8, Th. 4.10]).  $k > m$  なる  $(k, m)$  に対し、 $\mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_k - \lambda_m)}$  上の正定値2次形式  $\zeta_{km}$  が存在して、 $\frac{1}{2}(\text{ad } X)^2 E_m = \zeta_{km}(X) E_k$ ,  $\forall X \in \mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_k - \lambda_m)}$  が成立つ.

これより、容易に次の補題を得る.

補題3.  $\delta = (\delta_k) \in \{1, -1\}^l$  とする.  $\delta_i = -1$  なる  $i$  に対し、

$$\text{Ad}(\exp X) E_i \equiv E_i + \sum_{\substack{r > i \\ \delta_r = 1}} \overline{\zeta}_{ri}(X) E_r \pmod{\sum_{k > m} \mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_k + \lambda_m)}},$$

$$\forall X \in \pi \cap \text{Ad}(\delta^*) \pi(1)$$

が成立つ. ただし、 $\overline{\zeta}_{ri}(X) = \zeta_{ri}(p_{ri}(X))$ ,  $p_{ri}: \pi \rightarrow \mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_r - \lambda_i)}$  は、 $\pi$  の root 空間分解に沿った  $\mathfrak{g}_{\frac{1}{2}(\lambda_r - \lambda_i)}$  への射影作用素.

補題3 と、 $\delta_i = -1$  ならば  $E_i \in \mathfrak{g}(2) \cap \text{Ad}(\delta^*) \mathfrak{g}(-2)$  であることに注意して、命題1を用いる. かくして、次の定理を得る.

定理4.  $\varepsilon = (\varepsilon_k), \delta = (\delta_k) \in \{1, -1\}^l$  とする.  $i_\delta = \max_{\delta_i = -1} (i)$  とおく. この時、 $(\varepsilon_{i_\delta}, \varepsilon_{i_\delta+1}, \dots, \varepsilon_l)$  がすべて同符号ならば、 $\mathcal{J}_{A_\varepsilon}^\delta = (0)$  が成立つ. 特に、 $\delta \neq 1$  ならば  $\mathcal{J}_{A_{\pm 1}}^\delta = (0)$ , ( $1 = (1, \dots, 1)$ ).

注意. 一般の  $\varepsilon$  に対しては、" $\delta \neq 1 \Rightarrow \mathcal{J}_{A_\varepsilon}^\delta = (0)$ " は成り立たない.  $G = Sp(2, \mathbb{R})$ ,  $\varepsilon = (1, -1)$ ,  $\delta = (-1, 1)$  で既に反例がある.

系. 制限写像  $\mathcal{J}_{A_{\pm 1}} \ni T \mapsto T|_{\Omega_1} \in \mathcal{J}_{A_{\pm 1}}^1$  (複号同順) は単射.

#### §4. Reduced generalized Gelfand- Graev 表現.

以後、 $A = A_1$  の場合のみを取扱う. 3.2 での記号を、添字  $\varepsilon$  を略して用いる. Abel 群  $\exp \mathfrak{g}(2)$  の unitary 指標  $\eta$  を、 $\eta(\exp X) = \exp \Gamma \eta'(X)$ ,  $\eta'(X) = B(X, \theta A)$ , ( $X \in \mathfrak{g}(2)$ ) で定める.  $\eta$  の  $L_A$  における stabilizer を  $K(A)$  とおくと、 $K(A) = K \cap L_A$ , 即ち、 $K(A)$  は  $L_A$  の極大 compact 部分群になる.  $N_A$  の既約 unitary 表現  $(\xi, \mathcal{H}) = (\xi_A, \mathcal{H}_A)$  を、 $Z = K(A) \ltimes N_A$  (半直積) の表現  $\tilde{\xi}$  に、次の如く拡張する.

(Case I).  $N_A = \exp \mathfrak{g}(2)$ ,  $\xi = \eta$ . 従って、 $\xi$  は  $K(A)$  上 trivial に  $Z$  の指標  $\tilde{\xi}$  に拡張される:  $\tilde{\xi}(kn) = \xi(n)$ ,  $k \in K(A)$ ,  $n \in N_A$ .

(Case II).  $N_A = \exp(\mathfrak{g}(1) + \mathfrak{g}(2))$  は two-step 巾零リ-群である. exponential 写像で  $N_A$  と  $\kappa(1)$  を同一視したとき、 $N_A$  での積は、

$(U, V) \cdot (U', V') = (U + U', V + V' + \frac{1}{2}[U, U']), U, U' \in \mathfrak{g}(1), V, V' \in \mathfrak{g}(2)$  で与えられる。この、 $Z$  の表現への拡張を見易くする為に、次の様なもの実現 (c.f., [8, 2.C]) が有用である。今、ベクトル空間の同型  $\mathfrak{g} = \mathfrak{o} \oplus \mathfrak{n} \xrightarrow{\sim} \mathfrak{p}$ ,  $\pi(X) = \frac{1}{2}(X - \theta X)$  を用いて、 $\mathfrak{p}$  上の複素構造  $J$  を  $\mathfrak{g}$  上に移したものを  $J'$  とする。この時、 $J'\mathfrak{g}(1) = \mathfrak{g}(1)$ 。この  $J'$  により、 $\mathfrak{g}(1)$  を複素ベクトル空間と見なす。次に、 $Q(U, U_1) = \frac{1}{4}\{[J'U, U_1] + \sqrt{-1}[U, U_1]\}$ ,  $U, U_1 \in \mathfrak{g}(1)$  とおくと、 $Q$  は  $\mathfrak{g}(1) \times \mathfrak{g}(1)$  から  $\mathfrak{g}(2)_{\mathbb{C}}$  への sesquilinear map になる。さらに、 $\langle U, U_1 \rangle = -\eta'(Q(U, U_1))$  は、 $\mathfrak{g}(1)$  上の  $K(A)$ -不変な Hermite 内積を定める。但し、 $\eta'$  は  $\mathfrak{g}(2)_{\mathbb{C}}$  上の  $\mathbb{C}$ -線型形式に拡張しておく。このとき、 $\xi$  は次の様に実現できる:  $dU$  を  $\mathfrak{g}(1)$  上の Euclid 測度として、

$$\begin{aligned}
 \mathcal{H} &= \left\{ \psi; \mathfrak{g}(1) \text{ 上の整函数, } \|\psi\|^2 = \int_{\mathfrak{g}(1)} |\psi(U)|^2 e^{-2\langle U, U \rangle} dU < \infty \right\}, \\
 (\xi(n)\psi)(U) &= \exp \{ 2\langle U, U_0 \rangle - \langle U_0, U_0 \rangle + \sqrt{-1} \eta'(V_0) \} \psi(-U_0 + U), \\
 U &\in \mathfrak{g}(1), \quad n = (U_0, V_0) \in N_A, \quad \psi \in \mathcal{H}.
 \end{aligned}$$

$K(A)$  は  $\mathcal{H}$  に、 $(\tilde{\xi}(k)\psi)(U) = \psi(\text{Ad}(k)^{-1}U)$ ,  $k \in K(A)$ ,  $\psi \in \mathcal{H}$  により unitary に作用する。 $\tilde{\xi}(kn) = \tilde{\xi}(k)\xi(n)$ ,  $k \in K(A)$ ,  $n \in N_A$  とおくことにより、 $\xi$  は  $Z$  の unitary 表現  $\tilde{\xi}$  に拡張される。

(Case II, 終)

さて、 $K(A)$  の既約 unitary 表現  $(c, E_c)$  を、 $N_A$  上 trivial に、 $Z$  の表現  $\tilde{c}$  に拡張しておく:  $\tilde{c}(kn) = c(k)$ ,  $kn \in K(A)N_A$ .

定義. 次の様に定義される  $G$  の smooth な表現  $(\pi_{c,\xi}, C^\infty(G; c, \xi))$  を、 $A$  に対応する reduced g. G. G. (r. g. G. G.) 表現 と呼ぶ。

$$C^\infty(G; c, \xi) = \left\{ f: \begin{array}{l} \text{(i) } E_c \otimes \mathcal{H} \text{ に値をもつ } G \text{ 上の } C^\infty\text{-函数} \\ \text{(ii) } f(gz) = (\tilde{c} \otimes \tilde{\xi})(z^{-1}) f(g), (g \in G, z \in Z) \end{array} \right\},$$

$$(\pi_{c,\xi}(g)f)(x) = f(g^{-1}x), \quad f \in C^\infty(G; c, \xi), \quad x, g \in G.$$

ただし、 $C^\infty(G; c, \xi)$  には、通常の Schwartz 位相を入れる。

### §5. Multiplicity one theorem.

(Case I) の場合に、幾つかの r. g. G. G. 表現が multiplicity free になる事を示す。そのためにまず、5.1 および 5.2 で一般論を展開する (c.f., [1], [4, §6]).

5.1. リー群  $G$  上の超函数  $T$ ,  $g \in G$  および  $G$  の diffeomorphism  $\sigma$  に対し、超函数  $L_g T$ ,  $R_g T$  および  $T^\sigma$  を、各々次で定義する:  $\langle L_g T, \varphi \rangle = \langle T, L_{g^{-1}} \varphi \rangle$ ,  $\langle R_g T, \varphi \rangle = \langle T, R_{g^{-1}} \varphi \rangle$ ,  $\langle T^\sigma, \varphi \rangle = \langle T, \varphi^\sigma \rangle$ , ( $\varphi \in C_0^\infty(G)$ ). ここで、 $(L_{g^{-1}} \varphi)(x) = \varphi(gx)$ ,  $(R_{g^{-1}} \varphi)(x) = \varphi(xg^{-1})$ ,  $\varphi^\sigma(x) = \varphi(x^\sigma)$ , ( $x \in G$ ).

$Z$  を  $G$  の閉部分群、 $d, d'$  を  $Z$  の指標とする。超函数  $T \in C_0^\infty(G)'$  が条件  $L_x R_{x'} T = d(x) d'(x') T$ , ( $\forall x, x' \in Z$ ) を満たすとき、 $T$  は  $(Z, d, d')$ -準不変であるという。

compact な台をもつ、 $G$  上の超函数全体を  $C^\infty(G)'$  で表す。

$C^\infty(G)'$  は、convolution を積として、代数になる。  $x \in G$  は、

$x$ におけるDirac測度  $\delta_x$ ,  $D \in U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$  は  $D\delta_1$  と同一視して、  
 $G, U(\mathfrak{g}_\mathbb{C}) \subseteq C^\infty(G)'$  と見なす。

$(\pi, H)$  を、 $G$  の Hilbert 空間  $(H, (\cdot, \cdot)_H)$  上への連続表現とする。 $C^\infty$ -vector 全体  $H^\infty (\subseteq H)$  上への  $G$  の作用は、 $C^\infty(G)'$  に  
 $C^\infty(G)' \times H^\infty \ni (T, v) \mapsto \pi_\infty(T)v \in H^\infty, (\pi_\infty(T)v, w)_H =$   
 $\int (\pi(g)v, w)_H T(g), (w \in H)$  により拡張される。 $H^\infty$  は、semi-  
norm 族  $\{\|\cdot\|_D; D \in U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})\}$ ,  $\|v\|_D = \|\pi_\infty(D)v\|_H$  により、  
Fréchet 空間になる。各  $\pi_\infty(T)$  は  $H^\infty$  上の連続作用素を定め、  
従って、 $C^\infty(G)'$  は  $H^\infty$  の双対空間  $H^{*-\infty}$  に、 $\langle \pi_\infty^*(T)w^*, v \rangle$   
 $= \langle w^*, \pi_\infty(T^j)v \rangle, (w^* \in H^{*-\infty}, v \in H^\infty, T \in C^\infty(G)')$  により  
作用する。但し、 $x^j = x^{-1}, (x \in G)$ 。 $(\pi^*, H^*)$  を  $(\pi, H)$  の反傾表  
現としたとき、自然な埋め込み  $H^\infty \hookrightarrow H^{-\infty} = (H^*)^{*-\infty}$ ,  $H^{*-\infty}$   
 $\hookrightarrow H^{*-\infty}$  は、ともに  $C^\infty(G)'$ -加群としての埋め込みとなる事  
に注意しておく。

空間  $C^\infty(G; d) = \{f \in C^\infty(G); f(gz) = d(z)^{-1}f(g), g \in G, z \in Z\}$   
上に、左移動によって定まる  $G$  の smooth な表現を  $\pi_d$  と書く。  
上と同様にして、 $\pi_d$  は  $C^\infty(G)'$  の表現に拡張される。また、  
 $(H^{*-\infty})^{d'} = \{w^* \in H^{*-\infty}; \pi_\infty^*(z)w^* = d'(z)w^*, \forall z \in Z\}$  とおくと、  
 $\text{Hom}_{C^\infty(G)'}(\pi_\infty, \pi_d) \simeq (H^{*-\infty})^{d'}$  (ベクトル空間の同型)  
が成立つ。

5.2.  $G$  を、中心有限、連結半単純リー群とし、記号は §1

に倣う。  $H_K$  を、  $H$  の  $K$ -finite vector 全体のなす  $U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$ -加群、  $\gamma \in \hat{K}$  に対し、  $H_K$  における  $\gamma$ -成分を  $H_\gamma$  で表す:  $H_\gamma = \{v \in H_K; U(k_\mathbb{C})v \text{ は } \gamma \text{ の multiple}\}$ . 次の2条件を満す  $(\pi, H)$  を、  $G$  の admissible 表現と呼ぶ: (i)  $\pi|_K$  は  $K$  の unitary 表現、 (ii)  $\dim H_\gamma < +\infty$ ,  $\forall \gamma \in \hat{K}$ . 2つの admissible 表現  $(\pi_i, H_i)$  ( $i=1, 2$ ) は、  $(H_1)_K$  と  $(H_2)_K$  が  $U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$ -加群として同値なとき、 infinitesimal に同値という。  $U(\mathfrak{g}_\mathbb{C})$  の中心を  $\mathfrak{Z}$  で表す。

命題5.  $G$  の閉部分群  $Z$  とその指標  $d$  に対し、 次の条件 (a) と (b) を満す  $G$  の involution  $\beta$  の存在を仮定する。 (a)  $Z^\beta = Z$ , (b) 任意の  $(Z, d, d^\beta)$ -準不変な、  $\mathfrak{Z}$  の同時固有超函数  $T$  は、  $T^\beta = T^i$  を満す。 この時、  $G$  の既約 admissible 表現  $(\pi, H)$  に関して、 次の (i) ~ (iii) が成立つ。

(i)  $\dim (H^{-\infty})^{d^\beta} \times \dim (H^{*- \infty})^d \leq 1$ . 等号が成立するならば、  $\pi^*$  と  $\pi^\beta$  ( $\pi^\beta(x) = \pi(x^\beta)$ ) は infinitesimal に同値。

(ii)  $\pi^*$  と  $\pi^\beta$  が同値ならば、  $\dim (H^{*- \infty})^d \leq 1$ .

(iii)  $d^\beta = \bar{d}$  の時、 任意の既約 unitary 表現  $(\pi, H)$  に対して、  $\dim (H^{*- \infty})^d \leq 1$ .

5.3. 我々が r.g.G.G. 表現を考察する場合に戻る。  $G_\mathbb{C}$  を、  $G$  を含み  $\mathfrak{g}_\mathbb{C}$  をリー環とする、 連結線型リー群とする。 この

subsectionでは、(Case I)のみ取扱う。まず、

補題6. (i)  $Y = \frac{\pi\sqrt{-1}}{2} \sum_{k=1}^l H'_{\gamma_k}$  は  $\mathfrak{a}$  の中心に属す。 (ii)  $w_0 = \exp Y$  は、 $W$  の最長元の  $N_K(\mathfrak{a})$  における代表元である。  
(iii)  $G$  の Cartan 対合は、 $w_0$  による内部自己同型で与えられる。

Cayley 変換  $\mu$  の、 $G_{\mathbb{C}}$  の内部自己同型への拡張を  $\tilde{\mu}$  で表す。  
 $G_{\mathbb{C}}$  の内部同型  $\beta$  を、 $x^{\beta} = \tilde{\mu}^{-1}(w_0 \tilde{\mu}(x) w_0^{-1})$ , ( $x \in G_{\mathbb{C}}$ ) で定める。

補題7.  $\beta$  は、 $G^{\beta} = G$ ,  $Z^{\beta} = Z$  なる  $G_{\mathbb{C}}$  の involution である。  
更に、 $\beta$  の微分  $\beta_*$  は、 $\beta_*|_{\mathfrak{g}(i)} = (-1)^{\frac{i}{2}} \text{Id}|_{\mathfrak{g}(i)}$  ( $i=0, \pm 2$ ) を満す。

$c$  を  $K(A)$  の指標と仮定し、 $d = (\tilde{c} \otimes \tilde{\xi})^j$  とおく。このとき、

命題8. 任意の  $(Z, d, d^{\beta})$ -準不変な、Casimir 作用素の固有超函数  $T$  は、 $T^{\beta} = T^j$  を満す。

証明の概略.  $T$  の代りに、 $R_{w_0} T$  を考える。 $R_{w_0} T$  に対して、定理4の系を用いれば、命題の証明は、次の事実([1, Prop. 2.3])に帰着される: 任意の  $(K(A), c, c)$ -準不変な  $L_A$  上の超函数  $S$  は、 $S^{\theta} = S^j$  を満す。



補題7と命題8により、 $(\beta, d, Z)$ は、命題5の仮定(a), (b)を満す事が判明した。従って、次の定理が成立する。

定理9.  $G$ を連結、線型単純リー群、 $G/K$ は、tube domainに解析同型なHermite対称空間と仮定する。  $c$ を  $K(A)$ の指標とする。このとき、 $G$ の既約admissible表現  $(\pi, H)$  に対し、次の(i)~(iii)が成立つ。

$$(i) \dim \operatorname{Hom}_G(\pi_\infty^*, \pi_{c, \xi}) \times \dim \operatorname{Hom}_G(\pi_\infty, \pi_{c, \xi}) \leq 1.$$

等号が成立つならば、 $\pi^*$ と $\pi^\beta$ は、infinitesimalに同値。

$$(ii) \pi^* \text{ と } \pi^\beta \text{ が同値ならば、 } \dim \operatorname{Hom}_G(\pi_\infty, \pi_{c, \xi}) \leq 1.$$

$$(iii) c \text{ が } \mathbb{R} \text{ に値をもつ指標の時、任意の既約unitary 表現 } (\pi, H) \text{ に対して、 } \dim \operatorname{Hom}_G(\pi_\infty, \pi_{c, \xi}) \leq 1.$$

### §6. 主系列表現の $\pi_{c, \xi}$ における重複度.

(Case I) とは限らぬ一般の場合に、定理4の系を用いて、主系列表現の  $\pi_{c, \xi}$  における重複度の評価が得られる。  $\sigma \in \hat{M}$ ,  $\nu \in \alpha_c^*$  に対して、  $\bar{P} = MA_p \theta N$  の表現  $\sigma \otimes e^\nu \otimes (1_{\theta N})$  から、smoothに誘導された  $G$  の表現を  $\pi_{\sigma, \nu}$  で表す。このとき、

$$\text{命題10. } \dim \operatorname{Hom}_G(\pi_{\sigma, \nu}, \pi_{c, \xi}) \leq \dim \operatorname{Hom}_M((\tilde{c} \otimes \tilde{\xi})|_M, \sigma).$$

注意. 整数  $q \geq 0$  に対し、 $\mathfrak{g}(1)$  上の  $q$  次同次正則多項式全体を、 $P_q$  で表す。  $P_q$  は  $\tilde{\xi}(K(A))$ -不変で、p. 11 で定義された  $\tilde{\xi}$  の表現空間  $\mathcal{H}$  は、 $\mathcal{H} = \sum_{q=0}^{\infty} \oplus P_q$  (直交直和) と表される。また、(Case II) においては、 $M$  に含まれる、 $K(A)$  の central, one parameter 部分群  $C^+$  で、その  $\mathfrak{g}(1)$  への作用が次の形で表されるものが存在する:  $\text{Ad}(k_0)|_{\mathfrak{g}(1)} = a(k_0) \text{Id}|_{\mathfrak{g}(1)}$ ,  $\forall k_0 \in C^+$ ,  $a$  は  $C^+$  の non-trivial な, unitary 指標。この2つの事実より、 $(c, \sigma)$  が与えられたとき、高々1つの  $q = q(c, \sigma)$  があって、 $\text{Hom}_M((\tilde{c} \otimes \tilde{\xi})|_M, \sigma) \simeq \text{Hom}_M(E_c \otimes P_q, \sigma)$  となることが示される。従って、命題10の不等式の右辺は有限である。

#### References

- [1] Y. Benoist, Multiplicité un pour les espaces symétriques exponentiels, Mém. Soc. Math. France, 2e série, No. 15 (1984), 1-37.
- [2] M. Hashizume, Whittaker models for representations with highest weights, Lec. in Math., Kyoto Univ., No. 14 (1982), 51-73.
- [3] N. Kawanaka, Generalized Gelfand-Graev representations and Ennola duality, Advanced studies in Pure Math., 6 (1985), 175-206.
- [4] B. Kostant, On Whittaker vectors and representation theory, Invent. Math., 48 (1978), 101-184.
- [5] C. C. Moore, Compactifications of symmetric spaces II: The Cartan domains, Amer. J. Math., 86 (1964), 358-378.

- [6] M. E. Novodvorskii - I. I. Piatetski Shapiro, Generalized Bessel models for a symplectic group of rank 2, Math. USSR Sb., Vol. 19 (1973), No. 2, 246-274.
- [7] M. E. Novodvorskii, On uniqueness theorems for generalized Bessel models, Math. USSR Sb., Vol. 19 (1973), No. 2, 275-287.
- [8] H. Rossi - M. Verge, Representations of certain solvable Lie groups on Hilbert spaces of holomorphic functions and the application to the holomorphic discrete series of a semisimple Lie group, J. Funct. Anal., 13 (1973), 324-389.
- [9] J. A. Shalika, The multiplicity one theorem for  $GL_n$ , Annals of Math., 100 (1974), 171-193.
- [10] H. Yamashita, On Whittaker vectors for generalized Gelfand-Graev representations of semisimple Lie groups, preprint (1984).